

Title	仏領アルジェリア期のムスリム女性教員に関する歴史研究： エリック・ジェニングズ氏のご講演から示唆を受けて
Sub Title	A historical study on Muslim female teachers in French Algeria : insights drawn from Eric Jennings' lecture
Author	Sottile, Marco
Publisher	三田史学会
Publication year	2025
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.94, No.3 (2025. 4) ,p.87 (243)- 104 (260)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 エリック・ジェニングズ氏講演会： ヴィシー政権下のフランス領アンティル諸島における教育改革? : 女性教員の罷免 (一九四〇-四三年) に着目して
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20250400-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

仏領アルジェリア期のムスリム女性教員に関する歴史研究

——エリック・ジェニングズ氏のご講演から示唆を受けて——

マルコ・ソツティロー

キーワード…フランスの植民地教育／ムスリム女性教

員／仏領アルジェリア／歴史研究

1. はじめに

二〇二四年四月二七日に慶應義塾大学三田キャンパスにて開催された三田史学会主催の講演会において、貴重な機会をいただき、心より感謝申し上げます。トロント大学のエリック・ジェニングズによる「ヴィシー政権下のフランス領アンティル諸島における教育改革？——女性教員の罷免に着目して——」と題する講演、非常に興味深く、また多くの示唆を与えてくれる内容であった。深澤安博氏とともに、ジェニングズ氏の講演後にコメントを行う機会をいただき、光栄に思う次第である。

筆者の講演後のコメントは、ジェニングズ氏の講演内容とそれに関連する二点の論文を基にして考えた。一つ目は二〇二〇年にフランス教育史に関する雑誌『教育史』に投稿されたジェニングズ氏とクララ・パルミストとの共同論文である⁽¹⁾。これは、ジェニングズ氏の講演内容の元となる。二つ目は、二〇一九年にパルミスト氏が『クリオ・女性、ジェンダー、歴史』という研究雑誌に投稿した論文である⁽²⁾。この論文は十九世紀末から第一次世界大戦の始まりまでの時期に着目し、フランス領グアドループにおける教育の世俗化プロセスに関して論じている。フランスの植民地教育に関する歴史研究において、これらの研究は非常に意義があると考えられ、その意義を主に三つ取り上げたい。

第一の意義は、アプローチと分析が三つの領域に交差している点にある。それは、①フランス本国における女性教員の歴史とフランス領アンティル諸島の女性教員の歴史、②アンティル諸島における植民地的状況とヴィシー政権の歴史研究、③フランスの植民地教育に関する歴史研究の三つの領域である。第二の意義は分析対象とされている史料にある。第二次世界大戦前、多少の困難を抱えてはいたが、教員は政治活動や組合活動に従事していた。しかし、ヴィシー政権下ではその活動が弾圧され、結果として教員の声も抑えられた。そこで、ジェニングズ氏とパルミスト氏の研究は、第二次世界大戦後の復職委員会など、非常に独自性のある史料を使用して行われている点の特徴であり、その史料が当事者の声に重きを置いている点も非常に評価されるべきである。第三の意義は、アンティル諸島における女子教育、特に女性教員のエージェンシーに着目している点にある。彼女たちはさまざまな戦略を用いてヴィシー政権の差別的政策に対抗した。ジェニングズ氏の講演では、結婚や未婚の選択、私立学校の開設、さらにはアンティル諸島を離れる選択といった戦略が取り上げられた。

筆者はフランス領アルジェリアの植民地教育に着目し

ており、特にジェンダー論の視点からフランスの植民地支配の文脈におけるムスリム児童を対象とする教育について、教育制度、教授法、教育政策の社会的経済的影響など様々な角度から研究を進めている⁽³⁾。本稿においては、まずジェニングズ氏とパルミスト氏の研究をフランス植民地教育の歴史研究における位置付け、そして、仏領アルジェリア期のムスリム女性教員に関する歴史研究の現状と課題について述べたい。

2. フランスの植民地教育に関する歴史研究の動向

本節は、パスカル・バルテレミー⁽⁴⁾による研究⁽⁵⁾に基づき、フランス植民地教育に関する歴史研究の動向を概観したものである。

二〇世紀初頭、アルベール・サロー⁽⁶⁾などの植民地行政に携わった人物は、「学校教育」を「文明化の使命」として捉え、植民地教育を文明の恩恵として評価した。しかし、アルベール・メミ⁽⁷⁾のようなアルジェリア人作家は、植民地教育が植民地化された人々を「二重に」縛りつけ、自立を阻害するものであったことを指摘した。独立後に研究が進められたにもかかわらず、植民地教育の歴史は

十分に研究されていないことが多いとバルテレミー氏が指摘している。この歴史は、地域ごとに異なる教育政策が存在し、複雑で多面的であるため、その網羅的な分析が難しい。近年の研究は、植民地教育の実際の影響や実際の実施をより深く理解しようとしているが、史料へのアクセスの不均等が依然として大きな課題となっている。この課題を踏まえて、これまで注目されなかった史料を見つけたジェニングズ氏とバルミスト氏の研究はいかに重要かがわかる。それでは、バルテレミー氏の論文を概観すると同時、フランス植民地教育に関する歴史研究の動向におけるジェニングズ氏とバルミスト氏の研究の位置付けについて考察する。

2・1. 「植民地期」(十九世紀末～二〇世紀初頭) から一九九〇年代までの研究動向

この時期に、フランスの植民地は、各植民地の現地人に対して本国の学校教育をどのように適応させるかについて議論していた。特にアルジェリア、インドシナ、アフリカでの征服が進む中で、教育問題に関する議論は激化した。教育体制の「共存」の問題が重要なテーマとなり、フランス本国の教育制度と現地教育制度をいかに

調和させるかが問われた。インドシナでは、エリート教育と一般大衆教育の違いについて激しい議論が交わされていた。植民地政府は、教育の現状について詳細な報告書や統計を作成し、フランス文化の普及を目的とした教育の必要性を強調していた⁽⁸⁾。

第一次世界大戦後、植民地教育に対する議論はより多面的になり、西アフリカへの注目や植民地の現地人の文化的発展に関する問題が取り上げられるようになった。ジョルジュ・アルデイ⁽⁹⁾のように西アフリカと北アフリカの植民地行政に携わった人物たちが教育に対する見解を発信し、教育の「道徳的」側面が強調された。特に一九三六年の人民戦線の影響を受け、女性教育の重要性が増していった。

一九五〇～六〇年代における歴史研究は以前の研究に対して反発する方向で展開する時期である。独立直前、特に左派的な勢力が強かった第四共和政期においてフランス植民地教育の不平等さに対する反発が強まった。特にアフリカとインドシナの知識人、作家、学生は、教育の貧弱さと、それが現地文化に与えた悪影響を批判し始めた。独立後には、現地人にとって植民地教育がいかに抑圧的で不平等だったかを分析し、その影響を強く批判

した。

一九六〇～九〇年代はポストコロニアルの分析枠における研究の蓄積の時期にあたる。一九六〇年代から一九九〇年代にかけて、植民地教育の歴史に関する多くの研究が進んだ。フランスの歴史家（イヴォンヌ・チュランド¹⁰）、ドニーズ・ブッシュ¹¹）は、アルジェリアや西アフリカにおける教育の実態について重要な研究を行い、アメリカ合衆国出身の研究者はインドシナ戦争期に関連したフランス語教育の問題などに焦点を当てた。これらの研究は、植民地教育が非常に不平等で実用的であったこと、特に現地人に対する教育の機会が限られていたことを明らかにした。

一九九〇年代以降は独立後におけるフランス植民地教育に関する歴史研究の総括と展望の時期にあたる。一九九一年以降、デニーズ・ブッシュ¹²やアントワヌ・レオン¹³などの研究者は、植民地教育の全体像を捉えた総括的な研究を発表し、各地域（アルジェリア、インドシナ、サハラ以南のアフリカ）の教育の特異性や、宣教師の学校と公立学校の影響を詳述した。また、一九九〇年代後半には、アリス・コンクライン¹⁴などの研究者が「文明化の使命」や、第三共和制期の教育政策の変遷について再

検討した。

一九九〇年代までの歴史研究の動向をまとめると、フランスの植民地教育に関する研究は、統計データや行政政策に焦点を当てた分析から、植民地教育の文化的・社会的影響について、特に植民地支配を受けた人々の声を通じて、より批判的な考察へと進展した。二〇〇〇年代以降の研究は、異なる植民地地域における教育の特徴をより深く理解する手助けとなり、その時代の教育制度における根深い不平等を浮き彫りにした。

2・2 二〇〇〇年代以降の研究の展開

二〇〇〇年代以降、植民地教育に関する研究は、テーマや地域の多様化が進んだ。特に教育の社会的側面、女性教育、学校と政治との関係、植民地教育政策における时期的断絶（ruptures chronologiques）、そして植民地教育の「特異性」に関する研究が増加した。

二〇〇〇年代以降の歴史研究は、まず植民地の現地人宣教師、世俗的な教員、そして植民地の行政官といった教育の担い手の役割に焦点を当てるようになった。また、オーラル・ヒストリーを通じて、現地人の児童・生徒やフランス人教員の経験に光を当てる試みも増えている。

さらに、フランスの公立教育と共存していた現地ユダヤ人や現地ムスリムの学校教育に関する研究が進み、特にアフリカにおけるユダヤ人学校やコーラン学校に関する調査が行われた。

植民地教育政策に対する対象者の受容に注目する研究がもう一つの著しい動向である。植民地教育は、現地のエリート層を育成し、最終的には植民地支配に対する反発を引き起こすことになった。植民地教育に対する現地人の受容も多様であり、学校設立を求める声、反対運動、教育制度をうまく活用しようとする戦略が見られた。

植民地教育の「特異性」の再考を試みる研究も現れ、特に植民地教育の「適応性」を巡る議論は依然として重要なテーマである。教育は、植民地の現地人をフランス文化に従わせ、あるいは「社会的変革」を目指していたが、同時に植民地の現地人を市民として育てることを避ける形で実施されていたことが強調されている。

植民地教育における言語教育の問題に着目する研究も主流な研究動向である。フランス語の教育は問題視され、特にニューカレドニアのように現地の言語がフランス化政策に対抗して残り続けた地域では、フランス語教育の課題が顕在化した。フランス教育制度の理念とその実施

における矛盾が、近年の研究における重要なテーマとなっている。

植民地教育が独立後の教育に与えた影響に着目する研究も重要な動向を示す。というのも、独立後、植民地時代の教育の影響は依然として色濃く残り、特に教師の養成や教育課程に関する問題が引き継がれた。ローラン・マニエールの¹⁵⁾研究では、独立後の旧植民地へのフランスの教育支援という「教育協力 (cooperation éducative)」の初期の試みとして「アフリカ化」などの教育改革が論じられている。

二〇一〇年の時点で、バルテレミー氏が今後の研究について次の四つの方向を示している。①植民地教育の歴史研究は、児童・生徒、教員、学校関係者に関するより深い伝記的アプローチによって豊かにされるべきである。②宣教師と教育史の歴史家との間で協力が必要である。③また、教育思想、政策、教育的実践、アクターたち(教員、児童・生徒)の間で、母国(フランス本国)と植民地の間でどのように知識や慣習が流通したのかをより深く理解することが提案されている。④フランスの植民地教育の歴史をイギリス帝国のそれと比較することも、研究を豊かにする可能性がある。

以上の内容を踏まえて、バルテレミー氏は植民地教育における課題の複雑さを強調しており、植民地支配者による社会変革の目標と、植民地の現地人の抵抗と適応との間に存在する緊張を浮き彫りにしている。さらに、植民地教育史において、より微細でバランスの取れた視点が求められており、植民地学校のアクターたち、教育的実践とその影響をローカルかつ文脈に即したアプローチで探求することが訴えられている。

2・3. 小 括

バルテレミー氏の論文に基づいて、ヴィシー政権下におけるフランス領アンティル諸島の女性教員に関するジェニングズ氏とパルミスト氏の研究を以下のように位置づけることができる。ジェニングズ氏とパルミスト氏の論文は、ヴィシー政権がどのように人種的かつ性別的な秩序を強制しようとしたか、そしてその中でアンティル諸島の現地女性教員がどのように犠牲となったかに焦点を当てている。また、同じくこれらの女性たちがどのように自らの権利を主張し、抵抗するための主体性を発揮したかにも言及している。この研究のアプローチは、二〇〇〇年代以降に始まった研究動向、すなわち「女性教

育」や「学校と政治との関係」に注目する研究に一致している。さらに、ジェニングズ氏とパルミスト氏は、ヴィシー政権下での女性教員の排除に関する改革が、どのように本国フランスとアンティル諸島で適用されたかを比較し、その影響を検討している。これはバルテレミー氏が提案した研究課題、すなわち「教育思想、政策、教育的実践、アクターたち（教員、児童・生徒）間で、母国（フランス本国）と植民地間でどのように知識や慣習が流通したのか」という課題に関連している。

しかし、ジェニングズ氏の講演後に行われた議論で示されたように、これらのアンティル諸島の女性教員の歴史が明らかにされることはできなかったのは、フランス領アンティル諸島の特有の要因によるものである。実際、アンティル諸島の女子教育の発展、女性教員の増加、彼女たちが市民であったこと、そして自らの名誉回復や賠償を求めるために行った行動がアーカイブに記録されていることが、これらの要因に該当する。フランス領アルジェリアにおけるムスリム女性教員の歴史も、ジェニングズ氏とパルミスト氏のように明らかにすることができるのであろうか？ 結論から言うと、フランス領アルジェリアの場合、この質問に対する答えは「はい」とは言い切

れない。

3. フランス領アルジェリア期のムスリム女性 教員に関する歴史研究の実態と展望

本節では、まずフランス植民地時代のアルジェリアにおけるムスリム女性教員に関する歴史研究が困難な理由を論じる。そして、これまでの研究が明らかにしたことと残された課題を概要した後、今後の研究の方向性と可能性について考察する。

3・1. ムスリム女性教員に関する歴史研究が困難な

理由

(a) 市民権の不所持と慎重な教育政策

第一の理由は、アルジェリアのムスリムは市民権を持っていなかったことである。実際、フランス領アンティル諸とは異なり、フランス領アルジェリアのムスリムは一九五七年（「フランス人ムスリム (Musliman Français)」地位の取得）まで市民権を持っていなかった。ムスリムの「個人身分 (statut personnel)」を定めた一八六五年の法令以来、ムスリムは「臣民 (sujet)」とされ、したがってフランス市民と同じ権利と義務を持たな

かった。一九四四年および一九五八年の大規模教育政策までは、ムスリムの子どもたち、特に女子ムスリムの教育は義務ではなかった。

フランス植民地時代において、ムスリム女子に対する教育政策は次のように要約することができる。⁽¹⁶⁾

①まず、一八四〇～七〇年代にわたる教育的実験と試行錯誤の時期が挙げられる。アルジェリアのウジェニー・アリクス＝ルース夫人が一八四五年に開校した裁縫学校は、ムスリム女子への世俗教育の先駆けであった。彼女は、ムスリム女子への教育がアルジェリアの「文明化」には不可欠だと主張し、家庭の要としてのムスリム女性を対象に教育を行った。学校は、初等教育に加え、職業訓練や貧困家庭への支援も行ったが、特に経済的支援が必要なムスリム女子が通っていた。一八五〇年のデクレにより、総督府はアラブ＝フランス学校を設立した。この学校は、ルース夫人の学校をモデルにし、アラビア語とフランス語を学びながら、針仕事などの職業訓練を提供した。目標は、ムスリム女性に生活の手段を与え、道徳的向上を促進することであった。しかし、一八七〇年代以降、行政制度に関する同化政策により、これらの学校は衰退した。この時期の教育実験は、植民地政策の

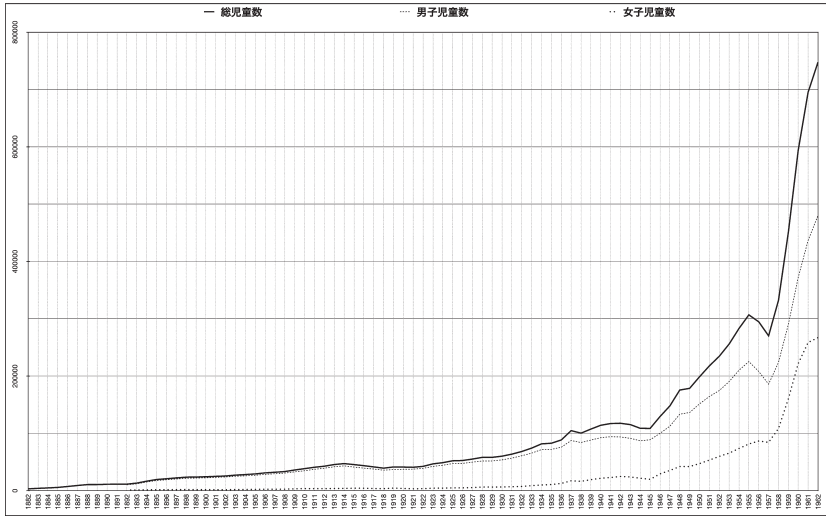
一環として行われ、ムスリム女性の教育は「文明化」の手段と見なされていたが、最終的には政治的・経済的な理由で縮小した。

②そして、一八八〇年代～一九一〇年代にわたる親原住民派による「原住民教育」の時期である。第三共和制の誕生とそれに伴った教育政策（フェリー法）を機に、フランス本国とアルジェリアの親原住民派は、アルジェリアのムスリム向けに教育を進めた。特に一八九二年のデクレで、幼児教育やムスリム女子教育が強調され、針仕事や家事を教えることが主要な内容となった。一八九〇年に定められたリベラルな学習指導要領は、アルジェリアのヨーロッパ人社会から批判され、一八九八年にはムスリムを対象とする職業教育が強化された。特に伝統工芸（刺繍、絨毯製作など）の再生を目指し、女子に工芸を教えるプログラムが設立された。見習い制度では、ムスリム女子は伝統工芸を学び、家庭内での働き手としての役割を果たすことと同時にムスリム女性の経済的な自立が期待された。これらの教育プログラムは、貧困層の家計を支える手段として評価されたが、一方で、伝統的な家族構造や社会慣習との摩擦も生じた。この教育政策は、植民地支配を強化する一方で、ムスリム女性に対

する社会的役割の変化をもたらし、文化的、社会的な緊張を引き起こしたと指摘されている。

③次に一九二〇～三〇年代にわたるムスリム女子に対する教育と職業教育の発展時期である。一九二〇年代から一九三〇年代にかけて、ムスリム女子に対する教育と職業教育が発展した。特に、トルコやエジプトの女性解放運動の影響を受け、フランス式の教育を受けた「原住民男性教員」のようにムスリム社会の一部はムスリム女子教育の重要性を強調した。彼らは、ムスリム女性が家庭内で重要な役割を担い、ムスリム社会の進歩に貢献するためには教育が必要だと主張した。一九三〇年代には、ムスリム女子教育に転機が訪れ、農村部から都市部への人口移動に伴い、沿岸都市中心に女子学校が設立された。一九三四年には、ムスリム女子向けの学習指導要領が発表され、知育と徳育が重視された。しかし、職業教育は従来の家庭科や育児教育に変更され、女子の教育期間は十二歳までに制限された。こうして、一九二〇～三〇年代にわたって、「原住民工芸」の再生を目指す職業教育局が設立され、特に農村部では伝統工芸の改良を目的とした職業教育が推進された一方、都市部では一般知識を重視する近代教育が進められた。

表1：初等教育の学校に通うムスリムの児童数（1881年～1962年）⁽¹⁸⁾



仏領アルジェリア期のムスリム女性教員に関する歴史研究

④第二次世界大戦後、都市と農村の格差を維持しつつも、一九四四年の教育大衆化政策と一九四九年の「ヨーロッパ人教育」と「原住民教育」の統合により、ムスリム女子の就学率が増えた（特に都市部において顕著であった）ことに留意する必要がある。これは主に、旧ヨーロッパ人学校に設置された「入門クラス」のおかげである。これらのクラスでは、フランス語を母語としないムスリムの子どもたちに特別な言語教育が提供されていた。就学率のデータを観察すると（表1を参照に）、フランス統治下のアルジェリアの教育政策はごく少数の子どもしか受け入れておらず、特にムスリム女子に対してはその傾向がさらに顕著であったことが分かる（一九五四年の時点、学齢期のムスリム人口は一九九万人；就学しているムスリムの子ども数は二九万三一一七人、つまり学齢期のムスリムの子どもたちの一五%⁽¹⁷⁾）。

(b) ムスリム家族による抵抗

植民地時代のアルジェリアにおいて、多くのムスリム家族は、フランスの文化を、自らの宗教・伝統的価値観を脅かすものと見なされるため、娘の就学に抵抗していた。植民地の学校は、フランス語やフランスの規範、信

念を押し付け、地元の習慣を軽視する同化の道具として見られることが多かった。特に男女混合の教育やフランス式の教育カリキュラムは、アイデンティティの喪失や

家族や宗教の価値観との断絶への不安を招いた。これに對して、家族はしばしば家庭教育を優先し、伝統的な価値観や知識の伝達を重視することで、自律性を強調し、植民地からの圧力に抵抗していた。この抵抗は、ムスリム女子のフランス式の教育へのアクセスを制限した。植

民地時代におけるアルジェリアの家族のムスリム女子の就学への抵抗を理解するためには、いくつかの資料が有益である。

まずは植民地当局の行政報告書や書簡に注目する研究には、教育政策や現地人住民の反応に関する情報が含まれている。これらの文書は、エクス・アン・プロヴァンスにある海外領土国立公文書館 (ANOM) で閲覧できる。

また、多くの研究は、アルジェリアにおける植民地教育への抵抗についても考察している。例えば、アメリカ人研究者のジュリア・クランシスミスら⁽¹⁹⁾ (一九九四年) は、植民地支配下での文化のおよび宗教的抵抗について探求している。マリカ・ラハール⁽²⁰⁾ (二〇二二年) は、

植民地社会における女性の役割と彼女たちが直面した特有の課題を考察している。

また、当時を生きたアルジェリア人女性の証言や口述記録を収録した書籍や社会学的研究は、家族の認識や懸念を示している。ファティマ・メルニシー⁽²¹⁾ (一九九一年) のような社会学者や人類学者は、女子教育に関連する文化的次元や家族の価値観も分析している。

独立後のアルジェリアにおいて、社会学的・人類学的研究も植民地主義と教育実践の影響について再検討している。ピエール・ブルデューとアブデルマレク・サヤド⁽²²⁾ (一九六四年) などの研究者は、農村社会や教育を含む

植民地の実践への地元の抵抗について分析を行っている。アルジェリアのポストコロニアル文学では、アシア・ジェバルなどのアルジェリア人作家が、植民地社会における女性の地位と教育の問題に関する緊張を描いている。彼女の作品『居室のなかのアルジェの女たち』⁽²³⁾ (一九八〇年) は、植民地主義の影響に対する女性と家族の闘いについて親密な視点を提供している。

これらの資料を組み合わせることで、植民地当局の視点とアルジェリアの家族の反応、そしてムスリム女子の就学に影響を与えた社会的・文化的な流動性を把握する

ことができる。

3・2. フランス領アルジェリアの植民地教育史研究
におけるムスリム女性教員

(a) フランス領アルジェリアにおける女子教育の世俗化

フランス領グアドループにおける教育の世俗化プロセスを研究したパルミスト氏と同じように、クロディーヌ・ロベール⁽²⁴⁾ギアールがフランス領アルジェリアにおける女子教育の世俗化に関して次の点を明らかにしている。

① フランス領アルジェリアにおける教員の世俗化と女性化…一八九〇年以前、フランス領アルジェリアの女子学校は主に修道女によって運営されていた。しかし、第三共和制に伴った教育政策を機に、教育の世俗化が進み、世俗的な女性教員の数は急速に増加した。一八九六年には、教員の六八%が世俗的な女性であり、この割合は一九三八年にはほぼ一〇〇%に達した。並行して、教員の性別比も変化し、一八九六年には教員の中で女性が男性を上回り、一九三八年には世俗的な初等教育における女性教員の割合が六七%に達した。

② 女性教員の採用…初めは、フランス領アルジェリアでの女性教員の採用は主に本国から行われていた。しかし、一九世紀末から、アルジェリアに住む多くの若いフランス人女性が教育職に就き、アルジェリアは女性教員の必要を現地で賄えるようになった。一八八八年から一八八九年にかけて、女性のための師範学校の生徒数は、男性用師範学校を上回り、一九一〇年代にはアルジェリアは本国からの応募者を必要としなくなった。こうして、フランス領アルジェリアの女性教員の大半がフランス本国の教員か現地生まれのヨーロッパ系女性で構成されていた。ムスリムの女性教員がごくわずかにいた理由として、ムスリム女子の少ない就学率が挙げられるが、後述べるように女性教員を養成する師範学校の制度にも関係する。

③ 「ヨーロッパ人学校」における女性教員の役割…女性教員は、フランス領アルジェリアにおける初等教育において中心的な役割を果たしていた。ヨーロッパ系住民が通う幼稚園や小学校、また女子職業学校の多くは女性教員によって運営されていた。また、当初は、初等学校は男女共学であり、多くの女性教員が男子クラスを担当していた。一九二七年時点で、共学の初等学校の大多数

が女性によって指導され、多くの女性教員が高学年のクラスや中等学校でも教えていた。

④「原住民学校」における女性教員の役割…「原住民教育」において、女性は専任教員として活躍していた。彼女たちは女子学校や世俗的な女子学級、職業補習学校を指導していた。これらの学校は、ムスリム女子に基礎教育（フランス語、計算、衛生）や手工芸（刺繍、織物）を教えることを目的としていた。さらに、女性教員は男子学校の低学年クラスを教えることもあり、特に自分が

⑤ムスリム女子への職業教育と職業訓練学校…最初は民間の取り組みによって設立された世俗的な女子職業訓練学校（裁縫学校）は、ムスリム女子に手工芸（織物、刺繍）を教えることを目的としていた。一九二〇年代に総督府はこれらの学校に対する補助金を支給した。同時に、ムスリム女子向けの職業教育も導入され、女子学校に附設された補習コースが提供された。

こうしてロベール・ギアール氏の研究は、フランス領アルジェリアの教育における段階的な世俗化と教員の女性化の過程を示している。女性は、ヨーロッパ系住民向けの学校だけでなく、ムスリムの子ども向けの特別学校

においても、またムスリム女子教育においても重要な影響を与えた。しかし、この研究が女性教員の大半を占めていたフランス本国かアルジェリア生まれのヨーロッパ系女性に注目している点からすると、フランス領アルジェリアの教育史において「ムスリムの女性教員」が課題として残っている。

(b) 女性師範学校に通ったムスリム女性のライフヒストリー
マリカ・レムダニ⁽²⁵⁾ベルカイドの著書（一九九八年）は、一九四五年から一九六一年の間に仏領アルジェリアの女性師範学校を卒業したムスリム女性の体験を探るものである。

しかし、女性師範学校で学んだムスリム女性のライフヒストリーについて触れる前に、レムダニ・ベルカイド氏は仏領アルジェリアの女性師範学校の歴史について述べている。ここではその主な変遷を紹介する（図1に参照）。

初等教育のための女性教員を養成するために最初に設立された施設は、一八七四年にミリアナ（アルジェ県）に創設され、その後一九四六年にアルジェ近郊のシャトー・ロワイヤルに移転した。一九四八年には、この学

オラン県

アルジェ県

コンスタンティーヌ県

女性師範学校: 1884-1962
男性師範学校「ヨーロッパ人教育」: 1933-1962

女性師範学校:
1874-1946: Miliana
1946-1962: El Biar

男性師範学校:
1865-1888: Mustapha
1888-1962: Bouzareaa

「原住民女性」師範学校:
1895-1897: de Thaddert ou Fella (Fort-National)

男性師範学校: 1878-1962
女性師範学校:
1908-1962: El Kantara



図1: フランス領アルジェリアの師範学校

仏領アルジェリア期のムスリム女性教員に関する歴史研究

校はエルビアールの新しい校舎に移り、女性師範学校として定着した。この学校は、公立の初等教育のための教員を養成していた。

一八九三年には、カビリー地方のタデルトにムスリムの女性教員を養成するための師範コースが開設された。一八九三年から一八九五年の間に数名の師範生が養成されたが、いずれも教員資格試験に合格しなかった。一八九五年以降、学問的な教育よりも織物や紡績の技術が重視されるようになったが、一八九九年からは二名の元師範生がカビリー地方の村で教員として働いていた。

コンスタンティーヌ県およびオラン県では、二〇世紀初頭に師範学校が創設され、女性教員を養成することを目的としていた。しかし、これらの学校は男性教員のための学校と同じような発展を遂げることはなかった。ムスリム女子向けの初等学校は限られた数であり、当時の状況からして、ムスリムの女性教員の養成は必須とは見なされていなかった。教育行政はヨーロッパ系の女性教員や、資格を持たないムスリム女性を採用することを好んだ。これらのムスリム女性はヨーロッパ系教員の監督下に置かれていた。一八七四年から一九四五年まで、女性師範学校ではムスリムの女性を一人も養成しなかった。

次に、レムダニールベルカイド氏が紹介した女性師範学校で学んだムスリム女性のライフヒストリーについて述べよう。

独立後、師範学校を卒業したレムダニールベルカイド氏自身の証言と八人の女性の経歴を通じて、著者は師範学校で学んだこととして、①自分の出身地からの疎外、②異なる世界の学び、③自分を守る必要性という三つの教訓に焦点を当てている。これらの若い女性たちは、ほとんどが貧しい家庭出身で、しばしば教員の娘であり、師範学校という厳格な環境の中で教育を受けた。しかし、独立後には予期しなかったキャリアを歩み、校長や教員などの職に就いた者も多かった。とはいえ、彼女たちの体験は緊張感に満ちており、特にヨーロッパ系の女性たちとの関係においては、社会的・文化的な隔たりが強調されていた。

師範学校のムスリム師範生は、少数派であった。彼女たちは、フランス人女性たちから西洋の「楽しみ」を学び、週末の外出や自由な生活を体験した一方で、厳格な学問的規律に取り組み、しばしばその生活に不安や疑問を抱えていた。しかし、この二つのグループの関係はアンビバレントであり、ムスリムの師範生たちはヨーロッ

パ系の女性たちから距離を感じていたが、同時に彼女たちから解放的な生き方も学んでいた。一九六〇年から一九六一年にかけてアルジェリア独立戦争が終戦に向かうと、その関係は劇的に断絶し、状況は一変する。とはいえ、彼女たちが師範学校で過ごした時間は、物質的な快適さや学校の安全性などの観点から、後年においては比較的肯定的に捉えられている。

レムダニールベルカイド氏のインタビューを通じて語られたこのライフヒストリーは、インタビューとそのインタビュイーの間に共有された経験に基づく親密さを示している。これらのムスリム女性たちは、植民地主義的な背景にもかかわらず、教育機関に対して反感を抱いていない。むしろ、彼女たちは師範学校で接した教員や校長を第二の家族として尊敬し、評価していた。とはいえ、著者は独立以降の物語には触れていないため、これらの女性たちのポストコロニアルなアイデンティティについては疑問が残る。フランスの教育をどのように受け入れ、それをアルジェリア独立後にどのように活用したのかは解明されていない。この研究は、この時期に起こった変革を細やかに捉え、貴重な知見を引き出しているが、ヨーロッパ系の女性のライフヒストリーも欠けている

るため、課題が多く残っている。

4. まとめ

本稿は、フランス植民地教育の歴史に関する研究の動向を概観し、特にフランス領アルジェリアにおけるムスリム女性教員に関する研究の難しさと展望について検討するものである。

フランス植民地教育の歴史研究は、二〇世紀初頭から始まり、時代とともにその焦点が変化してきた。初期の研究では、植民地教育は「文明化の使命」として捉えられ、教育政策は植民地支配を正当化する手段と見なされた。しかし、独立後の研究では、教育が現地人を抑圧し、文化的アイデンティティを侵害する手段としての側面が強調されるようになった。一九九〇年代以降の研究は、植民地教育の多様な側面を包括的に捉える方向へ進展し、現地人の教育経験やその社会的・文化的影響を重視するようになった。

二〇〇〇年代以降、植民地教育に関する研究はさらに多様化し、特に教育政策における性別、民族、社会階層の違い、そして教育の政治との関連に注目する動きが強まった。現地の児童・生徒や教員の経験に関する口述歴

史の重要性が増し、フランスの公教育と現地の宗教的な教育の関係が再評価されている。また、植民地教育が独立後の教育体制に与えた影響、特に教員養成や教育課程の継承に関する問題が重要なテーマとして扱われている。ジェニングス氏とパルミスト氏の研究は、ヴィシー政権下のフランス領アンティル諸島における女性教育に焦点を当てている。これらの研究は、女性教員が直面した人種的・性別的な抑圧と、それに対する抵抗を考察している。特に、現地女性教員がどのように権利を主張し、抵抗の主体性を発揮したのが注目されており、バルテレミー氏が提案した本国と植民地の間に流通する「教育思想、政策、教育的実践」に関する課題にも関連している。

一方で、フランス植民地時代のアルジェリアにおけるムスリム女性教員に関する研究には、いくつかの困難な理由がある。第一に、ムスリムは市民権を持つておらず、教育政策も不十分であったことが挙げられる。特に、ムスリム女子教育は十九世紀半ばから試行錯誤され、最初は裁縫学校と職業訓練が中心だったが、行政制度を対象とした同化政策により縮小された。その後、二〇世紀初頭にはムスリム女子の対する一般教育が進展し、ムスリ

ム女性の社会的な役割変化をもたらしたが、それでも教育機会は限られていた。

上記の実態に関連して、ムスリム女性教員に関する歴史研究は、アルジェリア植民地時代の教育政策や社会的背景を詳述することが重要であるが、資料の不足や政治的な障壁から依然として困難である。今後の研究では、より詳細なアーカイブ調査や現地資料の発掘が求められるとともに、ムスリム女性教員が果たした役割や教育の影響を、個別の事例に基づいて分析することが重要となるであろう。また、フランス本国と植民地間での教育の知識や慣習の流通についても、より深い理解が求められている。

本稿では、フランス植民地時代のアルジェリアにおけるムスリム女性教員に関心を持つ歴史家が直面している困難について述べてきた。一九九〇年代には、フランス領アルジェリアで教育を受けたムスリム女性教員とインタビューを行う機会がまだあったが、時が経つにつれて、その貴重な証言の源は必然的に減少していることを認めざるを得ない。それにもかかわらず、CDHA⁽²⁶⁾ (Centre de Documentation Historique sur l'Algérie) のオンラインアーカイブセンターは、個人のアーカイブやオーラル・

ヒストリーの収集を行っている。これらの史料やデータは関心を持つ研究者に提供されている。CDHAの活動は主にフランス在住のヨーロッパ系女性(アルジェリア独立後の引揚者、ピエ・ノワール)に焦点を当てており、レムダニールカイド氏の研究を補完することができるであろう。そして、ムスリム女性に関する証言を収めた史料については、依然として難しい問題である。しかし、フランス領アルジェリア期の新聞・雑誌のデジタル化とその容易なアクセス、または個人の史料収集は、この研究分野を発展させる可能性を秘めている。

フランスの植民地教育史に新たな光を当てているジェニングス氏やパルミスト氏の研究のように、今後の研究では、より多様な視点を取り入れ、教育がどのようにに植民地支配の道具となり、またどのようにに現地社会に影響を与えたのかを深く掘り下げていく必要がある。

註

(1) Clara Palmiste et Eric Jennings, «La révocation des institutrices antillaises sous Vichy (1940-1943)», Histoire de l'éducation [En ligne], 153 | 2020, mis en ligne le 01 janvier 2023. URL: <http://journals.openedition.org/histoire-education/5173>; DOI: <https://doi.org/10.4000/his>

toire-education,5173

- (2) Clara Palmiste, «La sécularisation du personnel enseignant en Guadeloupe (1880-1914). Enjeux sexuels et raciaux en contexte colonial», *Clio. Femmes Genre. Histoire* [En ligne], 50 | 2019, mis en ligne le 02 janvier 2023. URL: <http://journals.openedition.org/clio/16934>; DOI: <https://doi.org/10.4000/clio.16934>
 - (3) ソンテナーレ・マルコ(二〇一九年)、「仏領アルジェリアにおける先住民スリム女子に対する植民地教育：「慎重な問題」の歴史の変貌」『フランス教育学会紀要』(31) 一五—三六頁；(二〇二三年)「第四共和制初期における仏領アルジェリアの教育改革—ムスリム児童とその家族に対する女性教育実習生の眼差しに着目して」『フランス教育学会紀要』(35) 五五—六八頁。
 - (4) パスカル・バルテレシーは、西アフリカにおける二〇世紀の女性史とジェンターの専門家である。彼女は特に女子教育に関する問題について研究を行い、最近では一九四〇年代と一九五〇年代における女性の政治的活動についても取り組んでいる。
 - (5) Pascale Barthélemy, «L'enseignement dans l'Empire colonial français: une vieille histoire ?», *Histoire de l'éducation*, 128, 2010, 5-28.
 - (6) Albert Sarrault, *Grandeur et servitude coloniale*, Paris, Éd. du Sagittaire, 1931, p. 146.
 - (7) Albert Memmi, *Portrait du colonisé. Portrait du colonisateur*, Paris, Gallimard, 1985 (1re éd. 1957), notamment
- 仏領アルジェリア期のムスリム女性教員に関する歴史研究
- (8) ment p. 122-134.
 - (9) *Congres international de sociologie coloniale. Rapports et procès-verbaux des séances*, Paris, A. Rousseau, 1901.
 - (10) Georges Hardy, *Une conquête morale. L'enseignement en AOF*, Paris, A. Colin, 1917, p. 203-204.
 - (11) Yvonne Turin, *Apprentements culturels dans l'Algérie coloniale. Écoles, médecines, religion, 1830-1880*, Paris, Maspéro, 1971.
 - (12) Denise Bouche, «Autrefois notre pays s'appelait la Gaule... Remarques sur l'adaptation de l'enseignement au Sénégal de 1817 à 1960», *Cahiers d'études africaines*, 1968, vol. 8, n° 29, p. 110-122, p. 120.
 - (13) Denise Bouche, *Histoire de la colonisation française*, Fayard, 1991, p. 243-273.
 - (14) Antoine Léon, *Colonisation, enseignement et éducation*, L'harmattan, 1991.
 - (15) Alice Conklin, *A Mission to Civilize. The Republican Idea of Empire in France and West Africa, 1895-1939*, Stanford, Stanford University Press, 1997.
 - (16) Laurent Manière, «La politique française pour l'adaptation de l'enseignement en Afrique après les indépendances (1958-1964)», *Histoire de l'éducation*, 128 | 2010, 163-190.
 - (17) ソンテナーレ・マルコ(二〇一九年)、「仏領アルジェリアにおける先住民スリム女子に対する植民地教育：「慎重

- 重々問題」の歴史の姿貌」『フランス教育学会紀要』(3)
115—116頁。
- (17) Kadi, Aïssa. «Histoire du système d'enseignement colonial en Algérie». *La France et l'Algérie: leçons d'histoire*, éditée par Frédéric Abécassis et al. ENS Éditions, 2007.
- (18) Desvages Hubert. «La scolarisation des musulmans en Algérie (1882-1962) dans l'enseignement primaire public français. Étude statistique». *Cahiers de la Méditerranée*, n° 4, 1, 1972. Les hydrocarbures, migrations et accueil. pp. 55–72.
- (19) Perkins KJ, Julia A. Clancy-Smith, "Rebel and Saint: Muslim Notables, Populist Protest, Colonial Encounters (Algeria and Tunisia, 1800–1904)", *Comparative Studies on Muslim Societies* (Berkeley: University of California Press, 1994). Pp. 393. *International Journal of Middle East Studies*. 1998; 30(3): 444–446. doi: 10. 1017/S0020743800066307.
- (20) Malika Rahal, *Algérie 1962. Une histoire populaire*, Paris, la Découverte, 2022.
- (21) Fatima Merissi, *The Veil and the Male Elite: A Feminist Interpretation of Women's Rights in Islam*, trans. Mary Jo Lakeland (New York: Addison-Wesley, 1991).
- (22) Pierre Bourdieu et Abdelmalek Sayad, *Le Déracinement. La crise de l'agriculture traditionnelle en Algérie*, Les Éditions de Minuits, 1964.
- (23) Assia Djébar, *Femmes d'Alger dans leur appartenance*, Éditions des femmes, 1980.
- (24) Claudine Robert-Guiard, «Les enseignantes laïques». *Des Européennes en situation coloniale*, Presses universitaires de Provence, 2009, <https://doi.org/10.4000/books.pup.7078>.
- (25) Malika Lendani Belkaid, *Normaliennes en Algérie*, L'Harmattan, 1998.
- (26) <https://www.cdha.fr>